

## 瓦礫の記憶論のために

Introduction to the Theory of Memory on Debris

神谷 英二\*

**要旨** 本稿は、ベルリンにある「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」と「ベルリン・ユダヤ博物館」を導きの糸として、瓦礫と廃墟を記憶する行為がどのような空間と時間において生じているのか、そしてこうした空間で誰かを何かを記憶し記念することが可能なのかを明らかにする作業のための序説である。議論の順序として、まずメモラシオンについて考えるために有力な手がかりとなるピエール・ノラの「記憶の場」とアライダ・アスマンとヤン・アスマンの「文化的記憶」について概観し、「記念の場所」について整理している。次に、記念の場所が置かれた空間を論じ、この空間をジル・ドゥルーズの概念により「消尽した空間」として描き出す。その上で、こうした空間がいかんにしてメモラシオンとしての記念の場所になり得るのかをヴァルター・ベンヤミンの「弁証法的形象」と「固有名」を手がかりに解明している。

**キーワード** 瓦礫 コメモラシオン 文化的記憶 消尽 弁証法的形象 固有名

### はじめに

ロベルト・ロッセリーニ監督の『ドイツ零年』。ドイツの瓦礫の記憶は、映像に定着され、作品となった。誰もがどこでもいつでも見られるものとなった。ネオリアリズムによる純粋に視覚的・音響的状況のなかで (Deleuze 1985: 13)、エドムント少年はベルリンの廃墟を歩き回る。もちろん今から見れば、これもまた「記

憶の政治学」の強力な道具ではなかったのかという正当な問いを発しうることだ。

それでは、映像とは異なり、空間と時間のなかに構築された、瓦礫と廃墟を記念する記念物はいったい誰が何を記念しようとしているのか。いかなる集合的記憶を表象しようとしているのか。こうした記念物がそもそも何かを記憶し、記念することが可能なのか。

ピエール・ノラが指摘するように (Nora

\* 福岡県立大学 人間社会学部 教授

1997: 4687-)、現代が「コメモラシオンの時代」であることは確かである。しかし、何よりここで大事なことは、現在のコメモラシオンは「国民的なコメモラシオンの古典的モデル」を超えて、「調和を欠いた多様なコメモラシオン言語から成る分散化したシステム」のもとにあるという指摘だ。これはフランス共和国に限ったことではない。例えば、日本の「戦後70年」は誰が何を何のために記念しようとしているのか。分散化したシステムのなかで、統一的な全体像を俯瞰的に見ることは原理的に不可能だ。コメモラシオンを検閲する超自我はもはや存在せず、カノンは消滅した。ここでは、過去との関係が選択的で開放的、柔軟で活気に満ち、絶えず生成状態にあるのだ。こうした状況にあって、瓦礫と廃墟を記憶し、記念するとはいかにして誰にとって可能なのか。

この研究では、8度も国家の首都となったベルリン (Vgl. Aleida Assmann 2007: 113) にある、新しいコメモラシオンのシステムを代表するとも思われる、ホロコーストとドイツの瓦礫と廃墟を記憶しようとする二つの記念物を導きの糸としよう。

まず、ピーター・アイゼンマンの設計による、「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」(通称：ホロコースト記念碑) (Denkmal für die ermordeten Juden Europas)。第二次世界大戦終結および強制収容所解放60周年、ドイツとイスラエルの国交樹立40周年である2005年に除幕された。ブランデンブルグ門の南に広がる空間。2711本の列柱。この場所が、プロイセン王国からナチス・ドイツに至るまでの時期には政府高官の官邸や官庁が立ち並んでいたことをしっかりと想起しよう。ヴィルヘルム通りには、総統官邸、宣伝省、親衛隊司令部もあっ

ただ。さらに、爆撃とベルリン市街戦で破壊された後は廃墟が残り、戦後はベルリンの分割で東西の境界領域となった。1960年代にはベルリンの壁建設によって廃墟が撤去され広大な無人地帯となっていた。いわば「歴史と記憶で満たされたヴォイド」(Huysse 2003: 66) である。そういう記憶と瓦礫と廃墟と空虚の上に広がる列柱。ドイツ連邦共和国が建設した、祖国が殺した人々を記念する公的なコメモラシオンである。

もうひとつ、ダニエル・リベスキンドの設計による「ベルリン・ユダヤ博物館」(Jüdisches Museum Berlin)。2001年9月9日、あの9.11の直前に開館した<sup>1)</sup>。傷だらけの博物館の建物。その真中には、空虚な空間である「ヴォイド」がいくつも貫通している。ホロコーストによりできた空白を記憶するための空間としての空虚。小さな亀裂を思わせる無数の窓。ホロコーストの軸とホロコーストの塔。可視的な建築によって不可視の空虚を見せようとする試みと言える。そして、ここではベルリンという都市とユダヤ人の歴史を表す二本の線が交叉する。内部に無数の亀裂を抱えた二つの線。かつてベルリンがグルーネヴァルト貨物駅<sup>2)</sup> から強制収容所へと追放した人々を記念する、ベルリン市立の公的なコメモラシオンの場である。

この二つの記念の場所は、ホロコーストを表現しうる表象はあり得ないことを不在の痕跡によって逆説的に表現しようとしている(安川 2015: 101)。これらは、例えば、再建されたダンツィヒとは異なる空間と時間のもとにあるだろう。ボグダン・ボグダノヴィッチが言うように、破壊されただけの都市は再びその物理的精神的輪郭を取り戻し、「その記憶とその都市としての性格のすべてが可視的または不可視的

に基づいている隠喩的システム、形象的比喩 (Tropen) (Bogdanović 1994: 138) を再構築することができるのだ。つまり、第二次世界大戦後に行われたヨーロッパ各地での都市の再建は、この隠喩的システムに支えられた集合的記憶の場としての都市を取り戻す行為だったのである。もちろん、集合的記憶と言っても、それはあくまでも他者の痕跡を含み込んだ複数的な記憶であることは言うまでもない<sup>3)</sup>。

本稿は、こうした瓦礫と廃墟を記憶する行為がどのような空間と時間において生じているのか、そして誰かを何かを記憶し記念することが可能なのかを明らかにする作業を開始するための序説である。議論の順序として、まずメモラシオンについて考えるための手がかりとなる「記憶の場」と「文化的記憶」について概観し、「記念の場所」について整理する。次に、記念の場所が置かれた空間を論じ、この空間を「消尽した空間」として描き出す。その上で、こうした空間がいかにしてメモラシオンとしての記念の場所になり得るのかをヴァルター・ベンヤミンの「弁証法的形象」と「固有名」を手がかりに解明する。

## 第1章 「記憶の場」と「文化的記憶」

### <ピエール・ノラの「記憶の場」>

ノラによる『記憶の場』の序論「記憶と歴史の間に一場の問題群」に目を向けよう。

「もしわれわれが自身の記憶を生き続けているのなら、記憶のために場を設ける必要などないはずだ。なぜなら、記憶を奪い去る歴史がないため、記憶のための場もまたないからである。その場合、あらゆる動作は、もっとも日常的なものにいたるまで、太古の昔からの信仰の

ように繰り返される、そのような動作では、行為と意味とが肉体のなかで一致している。だが、痕跡や距離や媒体が存在するやいなや、われわれは真の記憶ではなく、歴史のなかに置かれる。」しかし、こういう状況は仮想的な構築物ではないのかという疑問が生じる。そこで、ノラは具体例を提出する。「伝統儀礼に日々忠実であり続けているユダヤ人の例を考えてみよう。彼らはまさしく『記憶の民』であり、近代世界に対して開かれることにより歴史家が必要となるまでは、歴史を気に懸けることなどなかったのだ。」(Nora 1997: 24)

彼は、実証主義的歴史学を仮想敵とし、「記憶の場」のプロジェクトを明確化する。

「記憶と歴史、この二語は同義どころか、あらゆる点で相反するということを意識しよう。記憶とは生命であり、生ける集団によって担われる。記憶は、たえず変化し、想起と忘却を繰り返す。また、執拗な歪曲にも気づかず、ありとあらゆる利用や操作を受けやすいが、長く潜伏していたかと思えば突然蘇りもする。(中略) 記憶は、いつでも現在の現象であり、永遠の現在形で生きられる絆である。」(ibid.)

「長く潜伏していたかと思えば突然蘇りもする」という記憶のあり方こそが私たちの思索にとっては重要だ。記憶はもともと、「多様で、強力で、集合的で、複数であり、個別である。」ここに、複数的で集合的な記憶という概念が登場する。

安川も指摘するように、「記憶の場」の構想は、もはや失われた過去の直接的な現実を再現することを目指すのではなく、「記憶」の痕跡を拾い上げることで、現在の中にある過去のイメージを記述することを試みるものである(安川 2008: 291)。

ここで、瓦礫と廃墟の記憶が、歴史の記述、少なくとも実証主義的歴史学による記述とは、鋭く対立する行為であることを押さえておこう。「記憶の場」には、過去のイメージが凝縮され、象徴的に体現されており、集団はこれらの象徴を介して自らのアイデンティティを想像し、創造する。ここでの記述の関心は、過去の事件それ自体ではなく、集合的記憶の中でその事件のイメージがどのように形成され、変容してきたのかに置かれている。

#### <文化的記憶：「機能的記憶」と「蓄積的記憶」>

アライダ・アスマンとヤン・アスマンは、アルヴァックスの集合的記憶理論を発展させて、歴史と記憶を対立させるのでもなく、同一視するのでもない道を探った。その結果、「集合的記憶」を「コミュニケーション的記憶」(komunikatives Gedächtnis)と「文化的記憶」(kultureles Gedächtnis)という二つに分け、さらに文化的記憶に「機能的記憶」(Funktionsgedächtnis)と「蓄積的記憶」(Speichergedächtnis)という概念を導入した(Aleida Assmann 1999: 130-)

コミュニケーション的記憶は、個人の生き生きとした記憶を基盤とし、具体的な生活連関におけるコミュニケーションと相互行為を通じて自然発生的に形成される。これは、個人がその人生の枠組みの中で同時代人と共時的に共有している経験を保持するものであり、可変的なものである。それに対して、文化的記憶は、外在化された記憶を蓄積するメディアと文化的実践を通じて構築される。その担い手である集団の個別性と連続性の基盤となり得る、拘束的で規範的な過去についての知識を保持し、それを世

代を貫いて伝達する。

さらに、想起と忘却が相互に補い合い絡まり合う「文化的記憶」のあり方を記述するために、「機能的記憶」と「蓄積的記憶」という区別が導入された。これによって、「文化的記憶」の潜在的な地平や、他者性の地平にも照明をあてることが可能になる。

「蓄積的記憶」とは、いわば「住まわれざる記憶」である。ここでは価値ある知識や生命に溢れた経験が喪失されている。それは意味に関して中立的な要素からなる無定形の塊でしかないであり、意味の布置や分節化はない。この記憶は純然たる保存を行う。文化のアーカイヴとしての「蓄積的記憶」には、過去の時代の物質的な残滓の一部が、生きた連関を喪失したあとでも保たれている。それに対して、「機能的記憶」とは「住まわれた記憶」である。この記憶は、文化のアーカイヴに価値の構造を与えて意味を産出する。この記憶は、知識の選別と評価という「カノン化」の役割を担う。「機能的記憶」には、共同体による選別のプロセスを通過した、アイデンティティ形成にとって重要な知識が顕在的な状態で保たれており、これは未来へ開かれている。

しかしながら、「蓄積的記憶」と「機能的記憶」の区別は存在論的なものではない(cf. 安川 2008: 286)。そして、想起されたもの、顕在的なもの、意識的なもの、我がものとされたものの領域である「機能的記憶」は、忘却されたもの、潜在的なもの、無意識的なもの、他なるものの領域である「蓄積的記憶」を地として浮かび上がる図と考えられる。それゆえ、蓄積的記憶が再び評価され、突如新たに機能的記憶となることもある。

こうした文化的記憶の理論は、忘却に抗って

過去と現在の連続性を維持し、集団の同一性を維持する文化装置としての、制度化された集合的記憶の分析を重視するものである。メディアと文化的実践を媒介として過去を能動的、選択的に構築する文化のプロセスを対象とする。したがって、私たちがコメモラシオンについて考察する際に、強い道具となり得る理論である。

### <記念の場所>

それでは、こうした「記憶の場」と「文化的記憶」の理論から見て、「記念の場所」にいかなる意味付与が可能なのだろうか。

アライダ・アスマン（Aleida Assmann 1999: 308-）、「地理的な場所は人間の生活と経験の形式を決定づけ、人間の生活と経験の形式は、その伝統と歴史をこの場所に刻印する」と考える。

しかし、記念の場所では、事情はこれとは全く異なる。それは、「もはや存続することなく無効になったもののうち、あとに残されたもの」である。記念の場所では、歴史はそれ以上先に進むことはない。しかしなぜ、無効になったもの、断絶した、または破壊された生活関連の痕跡、ばらばらになった断片、つまり瓦礫に埋もれた廃墟を、記憶し想起することができるのだろうか。

彼女は、それでもなおその場所の歴史は終わってはならず、そこに残る物質的遺物（まさに瓦礫）が物語の要素と文化的記憶の標点になると考えている。

もちろん、征服、喪失、忘却によって一度破壊された連続性を回復することはできない。記念の場所には、もはや存在しないが、想起により蘇らせることができるものがある<sup>4)</sup>。そうした場所では断絶と不連続性が際立っている。そ

こにはまだ存在しているとは言えないかもしれない何かがあり、それはただ不在を指し示しているのだ。

したがって、記念の場所は、蓄積的記憶から新たな意味連関によって賦活され、不在の機能的記憶を表象している「記憶の場」と言える可能性がある。

## 第2章 瓦礫の空間

### <テラン・ヴァーグ>

瓦礫の空間について考察するために、まずは、建築家の言葉に耳を傾けよう。

バルセロナで活躍した建築家のイグナシ・デ・ソラ＝モラレス・ルビオー（Ignasi de Solà-Morales Rubió）が提唱した「テラン・ヴァーグ」（terrain vague）は、字義どおりには「空き地」であり、不安定で曖昧な場を意味する（Davidson 1995: 118-）。これは瓦礫と廃墟の空間について考える際、重要な手がかりを与えてくれる概念である。

ここであえてフランス語を使うことには一定のねらいがある。terrainは、「正確に区画された土地の広がり」を意味する。さらに、「広大で、さほど厳密に画定されていない領域」でもあり、可能性としては利用できるものの、「自分たちが部外者であるような何らかの規定をすでに受けている土地の一區画」という物理的観念と結びついている。また、vagueは、ラテン語のvacuusとvagusという二つの語源が合体している。vacuusは「空虚で占有されていない」、「開放された、利用できる、先約のない」、vagusは「不確定な、不正確な、ぼんやりした、不明瞭な」といった意味である。

こうした意味を含むテラン・ヴァーグは、不

特定で不明瞭な空間でありながら、用途や活動の不在と、自由や期待の感覚を伴う「喚起的潜在力」をもつ空間であると彼は考える。

それは、「何かしら一連の出来事が起こったのちの放棄された空虚な場所」であり、「都市の日常的利用にとっては外在的ではあるが、都市そのものには内在的」である。そこに実在しながらも忘れ去られたかのような場所であり、「過去の記憶が現在よりも優勢である」ように見える。日常的な都市活動から離反してしまっているにもかかわらず、ここには「わずかに残された価値だけが生き残っている」という。この「価値」とはいったい何か。忘れ去られた場所に「価値」が残り得るのはなぜか。それは「何かしら一連の出来事が起こった」ことの痕跡そのものなのか。

使われなくなった、放棄された「工業地帯、鉄道駅、港、危険な住宅地区、そして汚染された場所」、具体的にはこうした場所がもはや都市ではないテラン・ヴァーグの例とされる。例えば、パリの都心で使われずに打ち棄てられていたオルセー<sup>5)</sup>は、まさにテラン・ヴァーグそのものだったのだ。「都市の物理的内部における、精神的に外部的な、都市の否定的＝陰画的イメージ」をもつ場所である。

ソラ＝モラレスは、ミース・ファン・デル・ローエによる、1928年のベルリン・アレクサンダー広場設計案のフォトモンタージュにコメントして、「未知の領域において、ひとつの出来事を生み出そう、既存のものに重ね合わせた独自の提案を無造作に提示しようとする身ぶり、都市の空虚の上に反復された空虚が存在している」(Davidson 1995: 123) と述べていた。「この沈黙した人工的風景は都市の歴史的時間に触れているが、それを抹消することも模倣するこ

ともない。」(*ibid.*)

私たちが導きの糸としている二つの記念物もまさに、「都市の空虚の上に反復された空虚」であり、何かを抹消することはなく、歴史的時間を記憶しようとしながらも模倣もしてはいない。

建築と建築家が「権力と抽象的理性」による攻撃的道具にならずに、テラン・ヴァーグにおいて活動するためには、計画された効率的な都市の連続性ではなく、「時間の経過ともろもろの限界の喪失によって生み出される流れとエネルギーの連続性」と「リズムの連続性」が鍵となることをソラ＝モラレスは強調している。

#### <消尽した空間>

次に、ドゥルーズが提起した「焼尽したもの」(*l'épuisé*) という概念を用いる (Beckett/Deleuze 1992)。

「消尽したもの、それは疲労したもの (*le fatigué*) よりずっと遠くにいる。」(Beckett/Deleuze 1992: 57) このように、消尽は疲労と対置される。

疲労したものには主観的可能性はない。したがって、最小限の客観的可能性も実現することができない。それでも最小限の可能性は残っているという。ドゥルーズのこの主張は、いったいどういうことだろうか。それは、人は決して可能なことのすべてを実現するのではなく、実現するにつれて可能なことをさらに生み出すからなのだ。

しかしながら、消尽したものは、可能なことのすべてを尽くしてしまう。もはや、何も可能にすることができない。彼は、可能なことを消尽することによって自分を消尽し、あらゆる疲労の彼方で可能なことと訣別する。可能なもの

を生み出すことは決してない。

実は、人は生まれる前に、すでに消尽しているのだ。消尽することは、あらゆる意味作用を放棄することである。実在があるとすれば、それは可能なものとしてのみである。

ドゥルーズによれば、「言語は可能なことを名づける。」人にとって言語はいつでも他者である。この言語が消えたとき、すべてはただ「そのとき」として見られ、言語が昏くしていたものがすべて取り除かれる。ここにイメージ（形象）が現われる。イメージが完全に限定されながらも無限定なものに達するのと同じように、空間はもちろん幾何学的には完全に限定されていないながら、いつも任意の、廢れた、無用の空間である<sup>6)</sup>。

「空間は、事件の実現を可能にする限りで、潜在性を享受する。」(Beckett/Deleuze 1992: 76) これが通常の空間のあり方である。しかし、消尽は任意の空間の潜在性を尽くしてしまうというのだ。消尽した空間では、「ここでもあそこでもなく、大地を踏むすべての歩みは、何にも近づくことがなく遠ざかることもない。」(Beckett/Deleuze 1992: 75)

これがドゥルーズの言う「消尽した空間」である。

ソラ＝モラレスのテラン・ヴァーグは、いわば建築家の眼で表現した「消尽した空間」である。それならば、ここには「価値」が痕跡として残っているはずだ。

デリダは、パウル・ツェランを論じた『シボレート』で、ツェランの詩に現れる名や日付は「灰」に他ならないとする。これこそが、「消尽した空間」に残る痕跡である。

「灰というものはある、おそらく、けれどもひとつとして灰は存在しない。灰というこの残

滓は、存在したものの、かつて現在という様態において存在したものの残りのように見える。つまり、それは『現前する-存在』という源泉によって己れを培い、己れを潤しているかのように見える。だがそれは存在から出てしまうのだ。つまりそれは己れが汲み上げているかに見える存在というものを予め汲み尽くしているのである。」(Derrida 2003: 77)

この記述でデリダは、どのようにして「消尽したもの」、「無」を書くかという問題、「無のエクリチュール」の問題に触れている。確かにあったものを記念する名や日付が焼き尽くされて、灰としての名や日付が存在するというのではない。ツェランの子午線が記す日付が存在を予め汲み尽くしているのであれば、灰は「かつてあった」とも言えない、ほとんど無に等しい「存在しえないものの痕跡」なのだ。(cf. 田中 2000: 384-385)<sup>7)</sup>

しかしながら、「消尽した空間」は、爆撃された都市のような歴史に刻まれる特異な場所だけに限られるのではない。

「たとえば、郊外の造成地を歩いていると、街の区画が途絶え、荒く削られた未整理の造成地帯に出ることがある。居住地区の区画はそこで曖昧に途絶え、造成地区から続いてきた道路は未整理地区へ数メートルばかり走り込んでいくが、その周囲に白いビニールや半ば土に溶け込んだハトロン紙のゴミ袋、千切られたグラフィア写真、空き缶を縁飾りにしながら、削られた石やアスファルト層、黄土色の土ぼこりなどにまぶされて途切れてしまう。たとえば午後の二時頃から三時、或いは四時から五時頃にかけて、その時間に無為の散歩を許される者なら誰でもが知るように、造成居住区にはただでさえ人影がなくなるのだが（中略）、その曖昧な、

街路が途絶えようとする境界区域にはさらに人間の気配がない。」(丹生谷 1996: 103-104)

進歩と開発の名の下に新しく造られた無人の廃墟。これは「場所化しえぬ干渉地帯」、「自然」と「人間」の双方の組織と秩序が破綻する空間であり、ドゥルーズによって「被知覚態」(percept)と呼ばれているものである。知覚主体にも知覚される客体にも属さないもの。被知覚態、それは「人間の不在における、人間以前の風景である。」(Deleuze/Guattari 1991: 159) (田中 2000: 126-)

丹生谷はこれをちょっとした散歩で見つけられる凡庸な場所だと言う。しかし、「凡庸さ」が殺戮と破壊を生み出すほどに危険と危機を孕むものであることは、アイヒマンとともに、アレントが教えてくれた通りだ (Arendt 1963)。

田中純も指摘するように、焼尽すると、その空間は人間主体を非人称化してしまう恐怖のイメージの場となる。生きられたものとして「空間」という概念が、「人間」という概念と双対概念であったのならば、「空間」が焼尽されると必然的に「人間」もそこで焼尽されることになるだろう (田中 2000: 125)。

### 第3章 「瓦礫からの目覚め」と「廃墟からの再生」のために

#### <場所の名と弁証法的形象>

それでは、こうした「消尽した空間」に、空虚や無ではなく、目覚めを宿した何かを見出しうるのか。おそらく手がかりは、空間を名指す固有名、「場所の名」である。

場所の名と記憶や歴史との関わりについて考察するためには、ベンヤミンの語る「形象」(Bild)の歴史性について探究することが重要

である。ある土地の過去と伝統のすべてを含んだものとして、場所の名は機能的記憶の役割を果たし、彼の言う弁証法的形象となり得ると、わたくしはこれまでの自分自身の研究をもとに考えている。

ベンヤミンは、「弁証法的形象」(dialektisches Bild)という表現をしばしば用いる。例えば、『パサージュ論』に書き留められた、次の断片を見てみよう。

「過去がその光を現在に投射するのでも、また現在が過去にその光を投げかけるのでもない。そうではなく形象のなかでこそ、かつてあったものはこの今と閃光のごとく一瞬に出会い、一つの状況を作り上げるのである。言い換えれば、形象は静止状態の弁証法である。なぜならば、現在が過去に対してもつ関係は、純粹に時間的・連続的なものであるが、かつてあったものがこの今に対してもつ関係は弁証法的だからである。つまり、進行的なものではなく、形象であり、飛躍的である。——弁証法的な形象のみが真の(つまりアルカイックではない)形象である。」[N2a, 3]

この概念を理解する鍵は歴史性である。ベンヤミンは、現象学における本質と比較しつつ、この点を詳細に論じている。

「形象を現象学における『本質性』と区別する点は、形象がもっている歴史的な指標である。(中略)形象が歴史的な指標を帯びているということは、ただ単に形象がある特定の時代に固有のものであるということのみならず、形象というものは何よりもある特定の時代においてはじめて解読可能なものとなるということの意味している。しかも、『解読可能』となるということは、形象の内部で進展する運動が、特定の危機的な時点に至ったということなのであ



る。そのつどの現在は、その現在と同時的なさまざまな形象によって規定されている。そのつどの今は、ある特定の認識が可能となる今なのである。この今においてこそ、真理には爆発せんばかりに時間という爆薬が装填されている。(中略) 解読された形象、すなわち認識が可能となるこの今における形象は、すべての解読の根底にある、批判的・危機的で、危険な瞬間の刻印を最高度に帯びているのだ。」[N3, 1]

このように、「形象が歴史的な指標を帯びているということ」は、形象がある特定の時代に固有のものであるということのみを意味するのではない。これは、形象というものは何よりもある特定の時代においてはじめて解読可能なものとなるということの意味している。しかも、「解読可能」とは、形象の内部で進展する運動が、特定の危機的な時点に至ったということである。

この概念をより理解するために、ベンヤミンによるアドルノからの引用を見てみよう。

「弁証法は形象において静止し、歴史的に最も新しいもののなかに、とうの昔に過ぎ去ったものとしての神話を、すなわち、根源の歴史としての自然を引用するのである。それゆえ、(中略) 弁証法と神話の区別をなくすような形象は、まさに『大洪水以前の化石』なのだ。こうした形態は、ベンヤミンの表現を使って、弁証法的形象と称してもよいかもしれない。」[N2, 7]

ここから分かるように、「弁証法的形象」とは、歴史の連続を破壊する「引用」を通じて構成される過去の形象のことである。この概念は、ゲーテの「原現象」に結びつけられる。

「弁証法的な形象とは、ゲーテの分析対象に対する要求、すなわち真の総合を提示するという要求にかなうような歴史対象の形式である。

それは歴史の原現象である。」[N9a, 4]

そして、弁証法的形象を理解する上で不可欠な、「根源」という概念は、「ゲーテの基本概念的、自然の領域から歴史の領域への厳密かつ異論の余地なき転用」である。「根源、それは原現象という概念を、異教的な観点で捉えられた自然の脈絡から、ユダヤ教的に捉えられた歴史のさまざまな脈絡に移し入れたものである。」[N2a, 4]

ここで、問題は「根源」という概念に移行する。

#### <根源、弁証法的形象、子午線>

ベンヤミンの考える「根源」(Ursprung)は、「起源」とは本質的に異なる。『ドイツ悲劇の根源』によれば、追想は「根源的了解へと遡る想起」であった<sup>8)</sup>。

「根源は、なるほど全く歴史的なカテゴリーであるが、発生(Entstehung)ということとは何の共通点もない。根源においては、発生したものの生成ではなくて、むしろ、生成と消滅のなかから発生しつつあるものが問題になるのである。根源は、生成の流れにおける渦であり、発生の素材を自己の律動のなかにまきこんでしまうのである。根源的なものは、むき出しの、あらわな事実の山のなかに、その真の姿を見せることは絶対ない。」(GS I, 226)

根源がEntstehung(発生・生起)と共通点をもたないということは、何かの始まりとしての起源とは無関係であるということの意味する(cf. 小林 1991: 220-221)。そして、根源は事実には属してはいない。

ここでは、事実における一回性と理念における反復性が弁証法的に相互に制約し合っているものであり、哲学的考察はこの弁証法へと問いを

発してゆくべきなのである。根源における律動は、一方では復元として、他方では復元における未完成として認識されるべきものである。ベンヤミンの弁証法は、ヘーゲルの弁証法とは大きく異なり、生成と消滅の弁証法であるとともに、一回性と反復性の弁証法であることが分かる。

「哲学的考察がとるべき方向は、根源のなかに内在する弁証法のうちに記載されている。この弁証法により、すべての本質的なものにおいて、一回性と反復性が相互に制約し合うものであることが明らかになる。」(GS I, 226)

カフカ論では次のように述べられている。

「忘却されているものは決して単に個人的なものではない。この認識をもって、われわれはカフカの作品のもつもうひとつ奥の敷居の前に立つことになる。忘却されているものはすべて、太古の世界の忘却されているものと混じり合い、これと無数の、定かならぬ、変転する結合をなしながら、繰り返す新たな奇形を生み出していくのだ。」(GS II, 430)

この忘却されているものが太古の世界の忘却されているものと混じり合い、変転し、新たな形象を産み出している場、これこそが「根源」である。

また、「弁証法的形象」について、次のようにも書かれている。

「思考は、思考の運動と同時に思考の停止を必要とする。思考が緊張に充ち満ちた星座において停止するとき、そこには弁証法的形象が現われる。」[N10a, 3]

「弁証法的形象」は、過去のすべてを潜在的に含んだ根源としての「歴史の原現象」として、思考が停止するときに現われる。そして、これは歴史における対決という形態を通して、歴史

のすべてを新たに見つめ直す可能性の地平を現在において開くものであることがわかる。

ツェランが「子午線」<sup>9)</sup>のなかで、形象とは「一度だけ、繰り返し一度だけ、そして、いま、ここにおいてのみ感じ取られたもの、感じ取られるであろうもの。」(Celan 2000: 199)と言っていた。この形象が到来する、どこにもない場所(ユートピア)こそがツェランの子午線なのだ。それは、空間でも場所でもない。あくまでも人がそこに暮らすことのない「線」なのだ。

「私は見つけます、何か——言葉のように——非物質的な、けれども地上のもの、何か円環状のものを、それは二つの極を超え自己自身に帰還しゆくもの、そしてその際——愉快にはれやかに——比喩＝熱帯地方(die Tropen)を横切っているものを。つまり私は見つけるのです……一本の子午線を。」(Celan 2000: 202)<sup>10)</sup>

## むすび

「テラン・ヴァーグ」、「消尽した空間」。ここにつけられた「場所の名」が、弁証法的形象として、ここを「記念の場所」とする「潜勢力」<sup>11)</sup>を孕んでいる。

もちろんここに、つねにこうした命名が可能なのかという問いが直ちに到来する。はじめに登場させた二つの場所が、弁証法的形象となり得る「名」をすでに持っているのかどうか。あるいは、いつの日か獲得し得るのかどうか。

田中純は、リベスキンドの「バルリン・ユダヤ博物館」が、固有名を通じて歴史性を獲得すると考えている(田中 1995: 230)。しかし、それはこの博物館が建つ場所の名ではなく、人の名である。追放された無数のユダヤ人の名。灰としての名。「かつてあった」とも言えない、

ほとんど無に等しい「存在し得ないものの痕跡」としての名。こうした固有名の文字の連鎖により、この建築物をこの場所をベルリンという「場所の名」<sup>12)</sup> に結びつけ、「記念の場所」としているのだ<sup>13)</sup>。

かつてリベスキンド自身が講演で言っていた。「〈空虚〉が露呈されるのは、名がじっと動かずに（沈黙して）とどまるがゆえに、そのなかに名指されないようなものが残る建築においてです。」空虚な消尽した空間でありながら、灰のごとく、人の名が忘却されずに、残り続ける。そこでは、固有名が弁証法的形象として、過去のすべてを潜在的に含んだ根源としての「歴史の原現象」として、思考が停止するとき、「時間の衡が釣りあって停止に達した現在」（GS I, 702）に現われる。そして、これは歴史のすべてを新たに見つめ直す可能性の地平を現在において開く。

これこそが、瓦礫と廃墟を記憶するベルリンの二つの場所が、消尽したものでありながらもホロコーストを記念するメモラシオンの場所となりうるロジックなのである。

もちろん、ここで次には瓦礫と廃墟を記憶しようとする場所の時間性がより深く問われなければならない。ここではベンヤミンの『写真小史』に書かれているアウラの定義を注視しよう。

「そもそもアウラとは何か。空間と時間の織りなす不可思議な織物である。すなわち、どれほど近くにであれ、ある遠さが一回的に現われているものである。夏の真昼、静かに憩いながら、地平に連なる山なみを、あるいは眺めている者の上に影を投げかけている木の枝を、瞬間あるいは時間がそれらの現われ方に関わってくるまで、目で追うこと—これがこの山々のアウラを、この木の枝のアウラを呼吸することであ

る。」（GS II, 378）

アウラは「空間と時間の織りなす織物」なのだから、瓦礫と廃墟を記憶し、記念する場所のアウラへ問いを向けることで、次の一里塚までの「一方通行路」が拓かれるであろう<sup>14)</sup>。

## 凡例

ヴァルター・ベンヤミンの著作からの引用は、（ ）内にGSの略号の後に、以下の全集の巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*, Unter Mitw. von Theodor W. Adorno hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Suhrkamp, 1972-1989.

ただし、『パサーージュ論』所収の草稿群は、[ ]内に整理番号を記す形式で示す。

## 参考文献

Adorno, Theodor W., (1996): *Kulturkritik und Gesellschaft 1, Prismen, Ohne Leitbild*, *Gesammelte Schriften Bd.10/1*, 2. Auflage, Suhrkamp.

Agamben, Giorgio (2005): *La potenza del pensiero. Saggi e conferenze*, Neri Pozza.

Arendt, Hannah (1963): *Eichmann in Jerusalem, a report on the banality of evil*, Viking Press.

Assmann, Aleida (1999): *Erinnerungsräume. Formen und Wandlungen des kulturellen Gedächtnisses*, C. H. Beck.

—(2006): *Der lange Schatten der Vergangenheit : Erinnerungskultur und Geschichtspolitik*, C. H. Beck.

—(2007): *Geschichte im Gedächtnis : von der individuellen Erfahrung zur öffentlichen Inszenierung*,

- C. H. Beck.
- Beckett, Samuel and Deleuze, Gilles (1992): Quad ; et, Trio du fantôme ; ...que nuages... ; Nacht und Träume. suivi de L'épuisé, Éditions de Minuit.
- Blanchot, Maurice (2000): L'attente l'oubli, Gallimard.
- (2002): L'instant de ma mort, Gallimard.
- Bogdanović, Bogdan (1993): Die Stadt und der Tod : Essays, Wieser.
- (1994): Architektur der Erinnerung: Essays, Wieser.
- Celan Paul (2000): Gesammelte Werke in sieben Bänden, Bd. 3, Suhrkamp.
- Davidson, Cynthia C. (1995): Anyplace, MIT Press.
- Deleuze, Gilles and Guattari, Felix (1991): Qu'est-ce que la philosophie?, Éditions de Minuit.
- Deleuze, Gilles (1983): Cinéma 1, L'image-mouvement, Éditions de Minuit.
- (1985): Cinéma 2, L'image-temps, Éditions de Minuit.
- Derrida, Jacques (1993): Khôra, Galilée.
- (1995): Mal d'archive : une impression freudienne, Galilée.
- (2003): Schibboleth: pour Paul Celan, Galilée.
- Halbwachs, Maurice (1997): La mémoire collective, Nouv. éd., Albin Michel.
- Huyssen, Andreas (2003): Present Pasts, Urban Palimpsests and the Politics of Memory, Stanford University Press.
- Jenger, Jean (1986): Orsay, de la gare au musée. Histoire d'un grand projet, Electa Moniteur.
- Lévinas, Emmanuel (1976): Noms propres, Fata Morgana.
- Libeskind, Daniel (1992): Fragmente von Utopia: Weitere Meditationen zur Zukunft Berlins, in: Lettre International 19, Winter 1992.
- (2004): Breaking ground, Riverhead Books.
- Nora, Pierre (1997): Les lieux de mémoire, édition en trois volume, Gallimard.
- Ricœur, Paul (2000): La Mémoire, l'Histoire, l'Oubli, Le Seuil.
- Schiller, Friedrich und Goethe, Johann Wolfgang von (1905): Briefwechsel zwischen Schiller und Goethe, Band 1, Verlag Eugen Diederichs.
- Schneider, Bernhard and Libeskind, Daniel and Müller, Stefan (1999): Daniel Libeskind : Jewish Museum Berlin : between the lines, Prestel.
- Tuan, Yi-fu (2002): Space and place : the perspective of experience, 25th anniversary ed., University of Minnesota Press.
- 柿木伸之 (2014) : 『ベンヤミンの言語哲学—翻訳としての言語、想起からの歴史』 平凡社
- 鹿島徹 (2006) : 『可能性としての歴史』 岩波書店
- 川村二郎 (1991) : 『アレゴリーの織物』 講談社
- 小林康夫 (1991) : 『起源と根源—カフカ・ベンヤミン・ハイデガー』 未来社
- (1997) : 『建築のポエティクス』 彰国社
- 佐藤貴史 (2010) : 「想起の都市、過去の召還 : W. ベンヤミンのメシア的時間論の思想的射程」 『聖学院大学総合研究所紀要』 48、聖学院大学、334-354
- 関口裕昭 (2011) : 『パウル・ツェランとユダヤの傷—〈間テクスト性〉研究』 慶應義塾大学出版会
- 田中 純 (1995) : 『残像のなかの建築—モダニズムの〈終わり〉に』 未来社
- (2000) : 『都市表象分析 I』 INAX出版
- (2007) : 『都市の詩学—場所の記憶と徴候』 東京大学出版会
- 丹生谷貴志 (1996) : 『死体は窓から投げ捨てよ』 河出書房新社
- 平野嘉彦 (2015) : 『土地の名前、どこにもない場所としての : ツェラーンのアウシュヴィッツ、ベルリン、

ウクライナ』法政大学出版局

榎垣立哉 (2010)：『瞬間と永遠—ジル・ドゥルーズの時間論』岩波書店

松浦寿輝 (1998)：『知の庭園—19世紀パリの空間装置』筑摩書房

安川晴基 (2008)：『『記憶』と『歴史』—集合的記憶論における一つのトポス』、『藝文研究』94、慶應義塾大学藝文学会、282(85)-299(68)

一 (2015)：「ホロコーストの想起と空間実践」、『思想』2015年第8号、第1096号、岩波書店、98-129

## 註

- 1) 9.11を記念するための、グラウンド・ゼロにWorld Trade Centerを再建する国際コンペでリベスキンドが当選し、マスタープランを担当したこと。2015年11月13日、パリ同時多発テロへの抗議と哀悼のために、One World Trade Centerのアンテナがトリコロールの三色にライトアップされたこと。破壊と殺戮のコメモラシオンの可能性を問うために、これらの事実をここに記録し、記憶しておこう。
- 2) 現在は旅客用として使われるこの駅に、1998年、「ブルーネヴェルト駅17番線」というインスタレーションが設置された。
- 3) 「集合的記憶が先行してあるのではなく、都市という機械の他者性を隠蔽するものとして、集合的記憶というイデオロギーが必要とされる。」(田中 2000: 289-290) そして、ポリスやキヴィタスがそうしたイデオロギーの形態であるという田中純の主張は十分に検討に値する。
- 4) しかし、この「もの」の存在様式はいかなるものか。これ自体が問われなければならない。「かつてあった」とも言えない、「存在し得ないものの痕跡」としての灰こそがこの「もの」なのだわたくしは考えている。
- 5) オルセーの破壊と再生、忘却と想起については、松浦寿輝の論考を参照 (松浦 1998: 98-)。
- 6) 「任意の空間」については、ドゥルーズが『シネマ2』でネオリアリズムの分析で展開した議論も参照に値する (Deleuze 1985: 13)。
- 7) ソラ=モラレスの言う、テラン・ヴァーグにほんのわずかに残された価値とは、この灰にともなう集合的で複数的な記憶のことであるとわたくしは考えている。
- 8) したがって、ベンヤミンの幼年時代の記憶は、非人称の集合的記憶と交差し、根源へと繋がっているのであった。
- 9) ツェランの子午線が、「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」と「ベルリン・ユダヤ博物館」を通っているのかどうか、今一度思索されるべきであろう。
- 10) ここで、レヴィナスがツェラン論の中で、「子午線」の記述を踏まえて、「詩は他者へ向かう。解き放たれ、その場には不在の他者に、詩は追いつくことを望む。」(Lévinas 1976: 61) と述べていたことを今一度想起しよう。
- 11) わたくしは「潜勢力」という語をアガンベン の定義により用いる。「なすこともなさないこともできる」のが潜勢力の特質である。「人間は自体的な非の潜勢力が可能な動物である。人間の潜勢力の偉大さはその非の潜勢力の深淵によって測られる。」(Agamben 2005: 281-282) よって、「記念の場所」へと現勢化せず、「テラン・ヴァーグ」として「消尽した空間」であり続けることの意味も探究されるべきである。
- 12) しかし、ワイマール帝国の首都ではなく、それはリベスキンドの言う「同一ではない、異なる人々のためのベルリン」(Libeskind 1992: 86) であろう。
- 13) ただし、田中とは異なり、ツェランやベンヤミンの名をわたくしは特別視しない。あくまでも無数の名の痕跡こそが思索すべき問題なのだ。
- 14) ゲーテは、象徴理論を創造していく途上で、場所

に大きな役割を与えた。1797年8月16日付けのフランクフルトで書いたシラー宛書簡の記述が重要である。象徴的価値は建物ではなく、土地にあると彼は考えている。書簡のなかで、彼は「わたしの住んでいるところ」「わたしの祖父の家屋敷と庭園のあった場所」という例を挙げている。砲撃で破壊され、今では瓦礫の山になってしまった祖父の家は重要ではなくて、大切なのは場所なのだとシラーに書いている。そうした象徴的な場所では、「愛情に満ちた思い出」から「注意を引くもの」、そして「意義深いもの」へと意識は向かうと述べる。それは「どんなところでも、どんな機会でも」可能であり、このプロセスで私的な思い出は徐々に関与しなくなってゆき、次第にその場所に固有の 아우ラ が強くなっていくと主張している。(Schiller/Goethe 1905: 415-418) (cf. Aleida Assmann 2007: 299-300)

本稿は、日本学術振興会・平成27年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）・基盤研究C、研究課題名：「まちの物語論」構築のための記憶・忘却・喪失・再生に関する現象学的解釈学的研究（研究代表者：神谷英二、課題番号：25370024）の補助による研究成果の一部である。